HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Three Essays on Cultural Goods Trade and Dyadic Data Analysis [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	高良, 佑樹
Citation	北海道大学. 博士(経済学) 甲第13250号
Issue Date	2018-06-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/71222
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Takara_Yuki_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

様式８

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経済学）　　氏名：高　良　佑　樹

学位論文題名

Three Essays on Cultural Goods Trade and Dyadic Data Analysis

(文化財貿易と二者間データ分析に関する三つの実証研究)

本研究は、文化的な要因が音楽や映画などの文化財と呼ばれる財の貿易に与える影響を明らかにすることを目的とする。文化的要因が総貿易量や文化財の貿易量に与える影響に関してはいくつかの研究が蓄積されているが、これらで扱われている文化的要因は貿易費用の代理変数である側面も持っているため、純粋な文化的要因を捉えているとは言い難い。本研究ではそれらと区別して文化的要因を定義し、それが与える影響を観測し、文化の持つ重要性について議論を行う。

第１章では文化というものが経済学の文脈でどのように取り扱われてきたのかについて、その背景を紹介しながら、文化的要因を取り扱うことの重要性について議論を行う。輸送技術やコミュニケーションツールの発展によって 20 世紀後半頃から現在にいたるまで、大国の文化が小国の文化を蹂躙するのではないか懸念が取りざたされている。一方で、消費者は自国内の、あるいは文化的に近しい海外の財を強く需要するため、そのような文化的収束は見られないとする議論もされている。これらを踏まえた上で文化的な要因が与える影響を取り扱った研究を紹介し、それらとは異なる手法を用いて文化的要因を捉えることの有用性について述べる。

第 2 章では既存研究とは異なる方法で文化的な差異を定義し、それが文化財の貿易に与える影響について、音楽 CD の貿易のデータを用いた分析を行う。これまでの研究と比較して、本研究では可能な限り最も多くの国を分析対象とし、世界全体を対象とした文化的差異の影響の検証を行っている。推定には貿易における重力方程式をモデルとして使用し、推定に際してこれを用いることで付随して生じる問題についても議論する。本研究では分析の対象を音楽 CD に限定することで音楽の文脈で文化を定義し、民俗音楽学と社会政治学の研究を引用することでより厳密に文化的な差異を表す 2 種類の変数を定義し、それが持つ含意を明らかにする。また、消費者に関して幾つかの仮定を置くことによって、推定を行う際に必要となる除外変数制約を満たすことが可能かどうかについても議論を行う。本研究の分析の結果から、文化的な差異が文化財の貿易における重要なコスト要因として機能していることが明らかになり、それについて考察を行っている。

第 3 章では、第 2 章で用いた貿易に関するデータのようないわゆる二者間データと呼ばれるデータを含む、パネル構造を持つデータを用いて、二方向の固定効果を持つ二段階モデルを推定する際に生じる付随パラメータバイアスを修正する方法について詳しく検討する。この章で示されている手法は二者間データのみではなく、パネルデータ一般にも適用することが可能である。

第 4 章では第 2 章での研究結果をふまえ、文化的差異を非対称な文化的関係性に拡張して議論を行う。文化的関係性は基本的に非対称であると考えられるが、このような非対称な文化的関係性をデータなどから観測することは通常困難である。本研究ではこの文化的関係性を観測されない非対称な異質性として捉え、交差固定効果の項としてモデルに取り入れ、これを推定することで文化的関係性を推定する方法を提示する。推定には Expectation Conditional Maximization アルゴリズムを用いる。これによって、取引関係にあるかどうかという標本選別構造を取り入れたモデルを推定することが可能となり、そのような構造によって生じる内生性やその他の経済変数をコントロールした上での純粋な交差固定効果を抽出することが可能となる。さらに、音楽的な文化を表す文化指標をここで得られた値に回帰することで、それらが文化的な関係性を捉えているかどうかを判断する。分析の結果から、非対称な文化的関係性が交差固定効果の推定値としてデータから測定されたことを確認した。また、得られた値を地図上にプロットしてその傾向を確かめることで、異なる文化背景を持つ音楽への需要や、流行トレンドを追い求める傾向の存在など、興味深い情報を文化的関係性の指標が抽出していることを確認した。また、このような関係性を交差固定効果の部分でコントロールしたことで、通常の重力方程式における係数推定値の持つ値を、より純粋なコストの指標として推定することにも成功した。

第 5 章では本研究で議論された内容を総括し、文化的な要因が経済学上の問題に与える影響に関して、本研究が明らかにしたことをまとめ、今後の研究の発展について触れ、結びとする。